



特集

鉄道事業の永続性

[活力ある沿線コミュニティを支える]

REPORT II

子育てしやすい 沿線づくりの推進。

子育てしやすい環境づくりを——

若いファミリー世代の流入と定着を目指し、

京王グループでは子育て支援事業を推進している。

そこには、公共性の高い鉄道事業者としての使命もある。

子育てに関する多様なニーズに対応しながら、

安全で安心できる保育環境が整った、

次世代にとって暮らしやすく便利な沿線づくりを進めている。

文◎茶木 環（ジャーナリスト） 撮影◎織本知之



株式会社京王子育てサポート
取締役社長

上田 浩次
Kouji UEDA

子育て施設を取り込み、駅前立地の至便な環境に整備

少子高齢化に向けて沿線価値の向上に取り組む。その具体的な施策を検討する中で、テーマの1つに上ったのが「子育て」だ。若い子育て世代を誘致するためには、子育てしやすい環境づくりが欠かせない。

2007年4月、京王電鉄は沿線価値向上の一環として「子育て支援事業」を推進する100%出資子会社の株式会社京王子育てサポートを設立した。

「子育て時期には、子育てしやすい住まいと安全で安心できる保育施設、職場までの至便な交通アクセスの3つの環境が必要だが、当社沿線にはこれらに加えて多摩の豊かな自然があり、子育て支援を一体で進められる環境が整っ

ている」と、株式会社京王子育てサポートの上田浩次取締役社長は語る。

京王の子育て支援事業は、06年の子育て支援マンション「京王安フィール高幡」の検討からスタートしている。

「子育てファミリーが暮らしやすい住環境が確保されていて、同じ建物内に保育施設も整備されている。これに、自治体の子育てサービス施設や医療機関も併設された賃貸マンションを企画した。ちょうど高幡不動産の駅舎改良と隣接の商業施設の建て替えもあり、街の再設計の中の新しい試みとして、開発が決まった」と上田社長は話す。

京王の子育て支援事業は、この「京王安フィール高幡」を出発点として、現在、東京都の認証保育所である「京王キッズプラッツ」と子育てファミリーサロン「京王キッズプラッツネクスト」

の運営、そして世田谷区からの委託事業である「子育てステーション烏山」の3つを中心に進められている。

子育てに優しい

幅広いサービスを提供

08年3月に竣工した京王安フィール高幡は、高幡不動産より徒歩2分という立地にある。

4階から最上階8階までの5フロアに配置した全25戸は、小さい子どもを抱える家族が暮らしやすいように、室内には子育て経験者によるアイデアを活かした工夫が凝らされている。

ビルの3階には、日野市立子ども家庭支援センターが設置されている。妊産婦や0歳〜18歳の子どもに関する相談、子育ての悩みなどを電話や面談で受ける総合相談窓口だ。

「多くの行政が少子化に向けて、子育て支援に力を入れている。子育て支援マンションについても、企画段階で日野市とも協議を行った。当社だけでできることには限界がある。自治体に協力してもらうことによって、こうした総合的な取り組みも初めて実現できたと考えている。今後も、自治体との連携を深めながら、事業の幅を広げていきたい」と上田社長は言う。

同じ3階フロアには子育てファミリーサロン「京王キッズプラッツネクスト」、2階フロアには東京都認証保育所「京

王キッズプラッツ」、さらに1階フロアにはクリニックなどが入居。京王安フィール高幡は、8階建てのビル全体に子育て世代の安心・安全な暮らしを配慮した機能を備えて完成した。

保育の質を何よりも重視

京王子育てサポートが直接運営する東京都認証保育所「京王キッズプラッツ」は、この京王安フィール高幡での議論を経て誕生した。

「当初、保育所の運営については民間の保育事業者に委託することも考えたが、自分たちでしっかりと運営をしてみたいという気持ちが強かった。また自治体の方からも、京王が手がけたほうが沿線の子育て世代が安心して利用できる」との意見をいただいた」と上田社長は誕生の経緯を話す。

子どもを育て、働く——そのためには、安全で安心できる保育施設が欠かせない。送り迎えに便のよい立地であり、子どもたちが心穏やかに楽しく遊べる環境づくりがなされていて、子どもたちの傍らにはいつも子どもたちの成長を温かく見守る保育士がいる。共働き世帯にとって保育施設とは、毎日の子育て支援そのものにほかならない。

子どもたちが出会い、働く親同士も仲間として出会う場所——キッズプラッツとは「Kids、子どもたちの」と「plats（スウェーデン語）・Plaz（ドイツ



子育て施設が整備された「京王安フィール高幡」

語) 広場、公園」を語源にしたもので、「子どもたちの広場、出合いの広場」という意味を持たせている。

「鉄道事業者の運営する保育所と言っても、単なる保有地の有効活用ではなく、沿線価値向上のための取り組みとして開発の企画段階から参画している。日々の運営から新しい園の設計、保育士の採用、園児の募集までと苦労は多いが、保育所を運営する以上、保育の質にはこだわりたい」と上田社長は語る。

現在、京王キッズプラッツは、京王アンフィール高幡のほか、京王多摩川・千歳烏山・南大沢に開設。京王子育てサポートは、パート社員も含め、保育士を中心に栄養士、看護師など93人の社員を抱える。

「年齢や経験も異なるため、研修の一環として保育士同士の交流や情報交換の場を積極的につくっている」と上田社長。

保育士たちが意見を出し合い、自分たちで選んだ言葉で、京王グループの理念を引き継ぐ「保育理念」も制定した。「子どもたち一人一人の人格や個性を尊重し、日々のふれ合いの中から、愛される満足感や認めてもらえている安心感を与えることで、子どもたちの成長を支えていく」という内容のものだ。こうした取り組みへの参加が保育士の意識と一体感を高め、全体の保育の質の向上につながっていく。

来年4月には、5カ所目となる永福町での開設が予定されている。既設の京王キッズプラッツはすべて駅近くにあるが、永福町は初の駅ナカだ。

「駅と商業施設との複合施設の中で、保育所の設置基準の厳しい3階での開設となる。当社にとっても初挑戦であるが、限られた面積の有効利用や施設運用面などに工夫を凝らしている。駅ナカ保育所としてモデルとなるものになりたい」と上田社長は意欲を見せる。

子育て世代の交流を深める

京王子育てサポートが運営するもう1つの子育て支援事業「京王キッズプラッツネクスト」は、子育てファミリーの集いの場として企画されている。

「京王アンフィール高幡に子育て世帯が交流できる広場をつくろうというアイデアから始まった。小学校就学前の幼児教室だが、親子の仲間づくりにも主眼を置いている」と上田社長は説明する。

プログラムには、プレスクール、リトミック、英会話、造形絵画の4つが用意されているほか、親子で参加できるプログラムやイベントも随時実施しているという。

また、保育士・幼稚園教諭の資格を持つコンシェルジュが、子育てに関する不安や悩みのサポートを行っているのも、京王キッズプラッツネクストの大きな

な特長だ。時にはコンシェルジュを交えて、親同士がおしゃべりを楽しんだり、情報交換をし合うなど、同じ子育て世代が集うアットホームなサロンとして活用されている。

行政と連携した

子育てステーション

子育て支援事業の3つめの柱「子育てステーション」は世田谷区と連携した事業だ。

東京23区の中で最も人口が多い世田谷区は子どもの数も多く、出生数も増加している。「東京一子育てしやすいまち 世田谷区」をスローガンに子どもに関する施策を積極的に推進しており、先進的な取り組みも多い。その中の1つが「子育てステーション」だ。

「子育てステーションは、在宅を含めたすべての子育て家庭に対する支援の充実を図るため、整備した施設。保育所やひろば、子どもの一時預かりなどを実施する多機能な子育て支援の拠点で、子育て家庭の交流の施設としてご利用いただいている」と世田谷区子ども部家庭支援課の岡本達二課長は話す。

現在、子育てステーションは世田谷区内の5カ所(三軒茶屋・梅ヶ丘・桜新町・成城学園前・千歳烏山)に開設されており、いずれも駅からほど近い場所にある。京王子育てサポートでは、



世田谷区子ども部
子ども家庭支援課長

岡本 達二
Tatuji OKAMOTO

このうちの1カ所である「子育てステーション烏山」を運営している。

「施設の『ステーション』という名の通り、利便性を重視し、駅近くに設置した。また、駅は小さな子どもからお年寄りまで多くの人が利用する。子育て中の方だけではなく、子育てにかかわりのない方にも、子育て支援について関心を持っていたく効果があるのではないかと岡本課長は、駅の効果に期待する。

子育てステーションには、4つの機能がある。子育て中の親子同士が立ち寄り、一緒に遊んだり情報交換をする、いわゆる「公園」のような役割を果たす「おでかけひろば」、理由を問わず時間単位で子どもを預けることができる「ほっとステイ」、働いている保護者の子育てを支援する「保育所」、18歳未満の発達障害またはその疑いがある子どもについて専門職が相談を行う「発達相談」の4つだ。

子育てステーション烏山では、「おでかけひろば」「ほっとステイ」東京都認



①～④
4階建ての「子育てステーション烏山」。親子
連れて賑わう子育ての交流の拠点だ。
④～⑥
1階に「おでかけひろば」、2階に「京王キッズ
プラッツ」、3階に「ほっとステイ」と「病後児
保育室」、4階に「発達相談室」がある。

証保育所「京王キッズプラッツ烏山」
「発達相談」を設置しているほか、他
のステーションにはない「病後児保育」
も実施している。

岡本課長は、こうした鉄道事業者と
の連携について、意義は大きいと話す。
「まず、駅に近いという立地条件で5
カ所の施設整備を行うにあたっては、
鉄道事業者の協力が大きな力になっ
た。また、子育て支援は非常に公共性
の高い取り組みであり、鉄道という公
共性の高い民間事業者が担うことの意

味は大きい」

子育てステーション烏山に取材に
行ってみた。途中、小さな子どもを抱
いた母親やベビーカーを押す父親など、
何人もの親子連れと行き会った。

1階の「おでかけひろば」をのぞいて
見ると、たくさんの親子連れが楽しそ
うに遊んでいる。子ども同士が仲良く
遊ぶそばで、親同士も話が弾んでいる
ようだ。世話役として立ち働く地域の
年配者の姿も印象深い。

「多機能の子育て拠点」とは、すべ

ての子育て世代に開かれた子育ての拠
点ということだ。同じ子育て世代が活
発に交流を行い、そこに地域の眼差し
が注がれる。

上田社長は「こうした施設の存在が、
子育ての閉塞感や孤立感をなくすこと
につながる」とその役割を語っている。

沿線に求められるものを見極める

京王の3つの子育て支援事業は、3
年半を経過して順調に進んでおり、新

たな事業展開についても、さまざまな
可能性を研究しているという。学童保
育や学習塾、親子カフェなどの事業に
ついても、リサーチと検討を続けてい
る。

「同じ鉄道事業者でも、社有地の有
無や沿線の自治体の動向など、ビジネ
スの環境の違いがある。今は、京王グ
ループとして次に何をすべきか、じっ
くり検討しているところだが、何より
沿線に何が望まれているのかを見極め
ていかなければならないと考えている。
自治体と連携すべきところは連携し、
鉄道事業者としてふさわしい取り組み
を推進する。安心・安全で住んでみた
いと思われる沿線づくりに取り組んで
いきたい」と上田社長は話す。

子育て時期という時間は、実はそれ
ほど長くない。だからこそ「子育て時
期には、子育てに必要な環境が整った
ところで暮らしてほしい」と上田社長
は言い添える。

京王グループの総合的な取り組みで、
すべての世代にとって住まう価値のあ
る沿線づくりが進められている。誰も
が住みたい、住み続けたいと願う沿線
——京王グループが目指す沿線価値の
向上は、住まう人々の生活をより安心
で便利なものへと変えながら、活力あ
る沿線コミュニティを支え続けるに違
いない。